

中津市校の高田「分校」について

野田 秋生

【中津市校】中津市校は明治四（一八七二）年十一月に発足したとされる。中津県から小倉県に編成替えになったときである。例の『学問のすすめ』が、この学校開設にあたって中津士民に向けた文章であったことは周知のとおりであるが、十二月に出版されたとき、それは福沢諭吉と小幡篤次郎の共著とされていた。実はそこには中津市校の開設にあたって帰津して実務にあたったのが小幡であり、かつ小幡が中津士民、特に士族の間に大きな信望を得ていたという事情があった。旧藩主奥平昌邁の家禄の一部の他に、中津士族の互助組織天保義社から二万両という資金がこの学校の基金として支出されたのだから、中津士族の支持とりつけが絶対に必要だったのである。

そして実際にも、中津市校への入学生は圧倒的に士族が多かった。そもそも福沢が中津に洋学校設立の必要を説き始めたのは早く文久二（一八六二）年、ロンドン滞在中のことであって、中津側でも明治二年には洋学校設立構想が具体化しつつあったらしい。しかしこれは、中津藩内部で、それも江戸・東京の福沢にうながされて出て来ている動きであって、中津の在地から、かつ藩政または士族以外の平民・農工商階層の中から出て来たものではなかった。

しかし『学問のすすめ』が「貴賤上下ノ差別なく」学問の必要を説いているように、中津市校はもろろん士族だけでなく農工商民への門戸を開こうとした。小幡の強い主張で「原書」科の他に「訳書」科を置いたのも、村方からの入学生に配慮したものであったというし、カリキュラムの詳細はわからないが、福沢が明治五年に大分県庁の求めで書いた「課業表」には「手習」

や「算盤」が含まれており、これが中津市校のそれに近いとすれば、そこにも農工商民の子弟の入学への配慮が指摘できる。おそろくこうした配慮が、中津市校の分校構想にもあったと思われる。

すなわち当初、中津市校は四〇校の分校を開設する計画であった。明治五年正月の「中津市校洋学出金方法」に次のようにある。

旧中津県洋学校出金之儀（中略）福沢諭吉小幡篤次郎等乃者え相託し、町在へ私塾四〇カ所程為相開候積ニ候得共、昨今右私塾教師相育候為、旧知事より寄付之本校一カ所ニて、原書訳書数学習書之四科相授居候（中略）少年生及村塾之生徒へは、主に翻訳書相授候趣向（後略）

この「私塾」は資金的には福沢・小幡が託された「旧中津県洋学校」すなわち中津市校の資金で開設し、教師は市校成業者を当てるというのだから、これは中津市校の分校である。「町在」「村塾」とあって、中津町の外へもそれは開設されるはずであった。もちろんここでも、「町在」からの分校開設要求があって、それに応えてというものではない。それかあらぬか、実際に中津市校の分校は、明治五年に中津町北門通りに一校、十年に中津町枝町に一校、市校の予備門としての付屬小学校が開設し、また中津町諸町に女学校が明治六年に出来ている他には、分校はついに設立されることはなかった。

もちろんそれは、明治五年の学制頒布によって公立の学校——小倉県は年末に皇学校と進脩館を合併して一六番中学にし、小学校も難行はしたが寺子屋（手習所）を下等小学と認める等の措置によって、じよじよに各地に設立されて行ったことにもよるわけである。但し、中津町の中でさえ、例えば堀川小学校では明治六年「学科程度ハ読書科ニ於テハ孟子十八史略日本外史等ヲ授ケ作文科ハ和漢文間々詩作セシムル」という状況で、中津市校の教育理念とは全く背馳する方向に進むという学校もあったのである。

【鈴木間雲宛小幡篤次郎書簡】ところで旧中津藩重役で、中津県で大参事を勤め、市校開設当時は小倉県に出任していた鈴木間雲に宛てた小幡篤次郎の次のような書簡がある。

拜復。花墨盥漱拜読。扱先日中ハ度々参堂、御病床を煩し恐縮之至ニ御座候。追々御快復相成、御出倉之上一昨夜御帰館之趣（中略）昨日分校試験に罷越し、昨夕罷帰り、御手紙拜見。何連昇堂御高話可承と奉存候得共、先ッ御報迄如斯御座候。敬具

十一月廿一日

篤次郎

閑（ママ）雲様

追而（後略）

この書簡には年を欠くが、小幡が鈴木宅を度々訪問しているから中津滞在時であり、小幡は中津市校が軌道に乗ると、翌明治五年の六月に上京するから、この書簡は明治四年十一月のものとしなければならぬ。そうすると市校を発足させてまだ間が無い時期のこととなるが、それでは小幡が「試験」に出掛けた「分校」とは何かが問題となる。

従来、明治五年に北門通りに出来た付属小学校が最初の市校の分校とされて来た。しかし小幡が試験（試験立会だろう）に出掛けているのだから、この「分校」はもちろん中津市校と無縁ではあり得ないだろう。つまり、もしこれが市校の分校であるとすれば、従来は全く知られていなかった分校が存在したことになるのである。

しかし注目されるのは、小幡は日帰りしていることである。尤も「昨夕罷帰」ったのはかなり遅かったと思われる。何故なら、「度々参堂」し病床を煩わすほど親しく、かつ小幡家と鈴木家は百米とは離れていないのに、疲労もあるうが、訪問を後日にのばしているからである。

当時の旅立ちは早朝が普通だったから、小幡のこの「分校」出張は、早朝から深更までの一日間を費やしたことになる。すなわち、この「分校」の所在地は、中津町から（試験立会の時間を含めて）一日行程の距離にあるのである。小幡が歩行したのか乗馬したか、または駕籠（当時中津に人力車があったかどうか確かめられなかった）などによったかわからないが、仮に歩行で（当時は一般に健脚であるから）一時間五キロとして、片道二〇キロ見当としてみると、下毛郡なら耶馬溪谷の口ノ林（現耶馬溪町）、宇佐郡なら宇佐八幡あたり、または小幡も居たことのある野本塾のあった白岩（現院内町）あたりという範囲が想定できよう。しかし明治四年のこの時点で、この辺りに試験をおこなう学校らしいものは見当たらない。

【高田の私学校】ところで、ここに明治二十一年十月調製の「高田学校沿革史」という史料がある。¹⁰ それに次の通りの記事がある（句読点筆者）。

明治六年五月高田学校を高田村鍛冶町吉原某ノ宅ニ開校ス、是ヨリ先キ明治四年初夏高田村有志輩（横山浩蔵、賀米権九郎、清末新郎治）等相謀リ一ツノ私学校ヲ設ケ子弟ノ教育ヲ普ネカラシメント欲シ、玉津村幡宣明ヲ迎へ、同年六月吉原運平宅ニ於テ開設ス、時ニ生徒百有余名ナリ、是ヲ本村学校ノ濫觴トス。是ニ至ツテ中津市校ヨリ八條平治郎ヲ迎エ教員トシ、幡宣明、山田荒治、吉成安理等ヲ以テ助教師トス、当時ノ教則、主トシテ福沢氏ノ翻訳書ヲ採用シ数学ハ専ラ珠算ヲ教授セリ（後略）

この記事は刊本『高田小学校百年誌』では省かれている。おそらく公立学校の百年史を編纂するという目的から、私学校段階の記事は省略されたのであろう。

① ところでこの記事によると、明治四年初夏に開校した私学校は中津市校より教師を招聘し、教則も市校にならったものらしい。珠算も、福沢が大分県に提出した教則案では手習いと共に強調して寺子屋（手習所）による庶民教育の継承をはかった

ことと一致している。

② さて高田は中津からは、当時の浜往還ではかれればば二〇キロ弱だから、先の試験立会を含めて一日行程の距離と考えられよう。

③ 八條平治郎（自筆「八条家譜」稿¹³には「平次郎」となっている。以下これによる）は旧中津藩の上士で石高百石、小幡家は二百石（但し家督は養子に入った孫兵衛）で、家は篤次郎が教頭であった藩校進脩館の西隣、小幡家は進脩館の東の道を隔てた筋向かいで、両家は五十米も離れていなかったから、早くから互いによく知る仲であった（但し明治二年に事情で八条家は永添村に移っていた）。平次郎は佐々木家から養子に入ったが、その兄佐々木吉十郎の室は篤次郎の妹、平次郎の妻の兄は和田慎次郎すなわち福沢英之助である。先の自筆家譜稿には明治「五壬申年正月廿日ヨリ十四年七月マテ三ノ丁市学校ニテ翻訳書旁漢書ノ教授ヲナス」とあり、高田側の中津市校教師八条という記述と一致する。五年一月からという日時からして、市校開設にあたっての初めからの小幡の協力者だったわけである。後に半竹半梅処という塾を興しており、本来は漢学系の人とすべきであろうが、残された八条家「書籍その他文書」中には福沢・小幡らの著書も多く、中には「市学校蔵」と墨書されたものもある。

幡宣明は神主で、維新前は漢学の家塾を開いており、清末新治は七歳のときから彼の塾で四書の素読を受けていたという。¹⁵
清末らが私学校を開設した時、幡が先ず迎えられたのはそういう縁によるのであろう。

④ しかし清末新治は、幡に素読を受けた後「駕海量容、恆遠精齋の門に入り漢学を修むること前後十二年（中略）世運の潮勢は特り漢籍の修養に甘んぜず、否な寧ろ之を陳腐として洋学を学ぶの急務たるを感ぜしむるもの多し、因りて中津私学校に入り英書を研究すること三年」、明治九年一二歳のとき家業を継ぐために帰郷したという人物であった。¹⁵高田に私学校を興したのは清末十七歳のときということになるが、「福沢氏ノ翻訳書ヲ採用」したのは、清末らの意図によるものと考えられるだろう（駕海は高田町郊外の草地村・現豊後高田市、恆遠は豊前上毛郡葉師寺村・現豊前市にあった漢学塾）。

以上①④により、小幡が「分校試験」に赴いた「分校」とは、この高田の「私学校」としてほぼ間違い無いであろう。尤も、資金的には中津市校とは全く関係なく設立されており、従って厳密には「分校」ではない。しかし明治四年段階でそういう厳密な意味で「分校」という言葉が確立していたわけではなく（先に見たように市校の文書には「私塾四十」と書いているし、慶応義塾の大阪・京都「分校」は明治六年の開設である）、小幡も市校のいわば兄弟校または同志校というほどの把握で「分校」と書いたのではなからうか。

だから正確には、この高田の私学校は中津市校の分校「的」なものであったと言ふべきであろう。

さてしかし、この私学校がどのようにして中津市校の「分校」になったかの経過を語る資料は今は見当たらない。しかし清末らが私学校を設立したのが明治四年初夏というから、中津市校発足以前であり、八条の赴任も記事によれば私学校設立の最初からではない。また小幡が「分校試験」に出張した十一月末は、肝心の市校の体制が十分に整備されてはいなかつたろう。してみると高田の私学校開設後に、何かの機会に中津での市校開設の動きが進行しているのを知った清末らが、その中心の小幡に働きかけ、小幡も乗り気になって（書簡に「分校」と位置付けているのだから）、その結果がこの小幡の出張になったのではなからうか。そうすると八条の赴任は小幡の推薦または依頼によるもので、この小幡の高田出張の前後であろう。推測にすぎないが、こうして清末らの企画による中津市校との連携、つまりは「分校」化が始まったと思われる。

【意義】さて、横山、賀来、清末は共に豪農・商である。賀来権九郎は佐田屋を称する酢・油等の醸造家、醤油醸造の藤三郎はその弟で、のち交詢社員、明治十六年に小幡篤次郎が高田町で学術演説会を開いた時には藤三郎方に宿泊している。プロモーターだったらしい。清末は地主、製菓業を起こしたり溜池築造など、事業家として活発に活動している。横山についてはよくわからないが、吉原運平は維新前は高田村の庄屋（伊能忠敬の測量隊の本陣を勤めている）で、先の豊前の恆遠家と縁続きの關係もあって、教育に関心が深かつたらしく寺子屋（手習処）を開いていた。子の吉原長二郎は分家して書肆帯屋を経営し、中津町の『田舎新聞』の取次販売店になっている。要するに彼らはいわゆる「豪富の農商」、福沢のいう「ミッツルカラス」であつた。

もともとこの地域は幕末期までに寺子屋（手習所）が大分県域（豊後）でも尤も濃密に展開していたのであって、つまりこの高田の中津市校「分校」は、そうした事情を背景に、「ミッツルカラス」指導によって、いわば地域住民の自生的な教育要求として実現したものであり、その点ではむしろ、中津市校よりも高く評価されるべきものであると言えよう。

尤もこの学校は、学制頒布を受けた大分県がたまたま帰郷していた福沢の指導を受けて、いわば福沢色の強い学校制度（教則・教課用図書など、中津市校の大分県拡大版）を発足させた明治六年末には公立学校に引き直された（先の『高田小学校百年史』の記述はこれから始まる）。そして翌七年、大分県が福沢路線を排除する方針に転じると、八条平治郎も明治七年には辞職に追い込まれてしまったのである。

（二〇〇三年二月二〇日）

注

- (1) 西沢直子「中津市学校に関する考察」『近代日本研究』一六巻福沢研究センター一九九九、六八頁
- (2) 文久二年四月十一日付島津祐太郎宛福沢書簡
- (3) 明治二年四月十七日付藤本元岱宛福沢書簡
- (4) 明治五年三月二十三日付高力衛門宛福沢書簡
- (5) 前出西沢論文（同誌）一〇五頁所収
- (6) 前出西沢論文（同誌）七五頁
- (7) 「堀川学校沿革史」（中津市北部小学校蔵）
- (8) 西沢直子「小幡篤次郎考一」（前出『近代日本研究』一七巻二〇〇〇年）一四二頁所収
- (9) 「中津地図旧藩住所位置及中津沿革記事慶応明治之間」（個人蔵・コピーを大分県先哲史料館蔵）

(10) 豊後高田市高田小学校蔵

(11) 中津市八条重男氏蔵。他に友石孝之『八條半坡先生詩抄』昭和三八年及び山家克巳『八條半波伝』昭和六〇年など

(12) 「中津藩士分限帳」(赤松文二郎『扇城遺聞』所収)

(13) (9) と同じ

(14) 「八条家書籍その他文書」一件(中津市立歴史民俗資料館蔵)

(15) 『大分県教育百年史』(大分県教育委員会一九七六年)一巻二四九頁

(16) 佐藤蔵太郎『西国東郡誌』(西国東郡役所大正一年)五一〇頁

(17) 前書五〇六〜九頁

(18) 後藤靖「自由民権期の交詢社の活動について」(『日本史研究』一三三三号)

(19) 『田舎新聞』明治一六年二月二八日、三月三日号

(20) 前出『西国東郡誌』五一二〜五頁

(21) 『豊後高田市史』(豊後高田市一九九八年)三三二頁所引『伊能忠敬測量日記』

(22) 『田舎新聞』明治一一年五月二七日号など

(23) 前出『大分県教育百年史』五七〜九頁

(24) (10) と同じ